

医療の革命 —— 医療安全の倫理、完璧に安全な医療

酒井亮二（日本医療安全学会 理事長）

日本の医療界から以下のような声が多数寄せられている。

医療安全対策には経費がかかる。医療経営者としては行いたくない。

医療安全は医療行為自体の向上に効果がなく、無駄。医療安全を無視して、医業本体を行う。

安全だけでは医療者の関心度がまったく低い。別のえさを巻いて、やる気を起こささせるべき。

いつ起きるかわからない医療事故の予防より、起きたときだけに対応すれば無駄が大幅に省ける。

無視、非協力、手抜き…。医療安全への巨大な抵抗勢力が存在している。日本と世界の医療者で医療安全の推進勢力は1割以下で、抵抗勢力は9割とも推察できる。巨大な壁が立ちそびえる結果、大学病院や大病院の内部でも医療安全文化は遅々として普及せず、事故は絶えない。

医療界に何が起きているのでしょうか？

本来、医業は他の業界に比べると、ミスと事故に対する許容範囲がきわめて狭い。病気を治してくれると期待する医療の現場で、医療ミス/医療事故に遭遇することを人々は全く拒絶している。不完全な安全意識は医療界には通用しない。その理由は、人命を扱う医療人の生命保護の職業倫理は、すべての職業で最も崇高な水準であるべきと強く要求されることにある。それに伴い、世界の人々は医療へは厳しい倫理の制約を課している。不良商品であれば交換して誤ればよいが、間違えた医薬品、有害な医薬品を渡すことは許されない。

ヒポクラテスは「安全でない医療は患者に行うべきではない」と指摘している。以来、数千年におよぶ医療の歴史において、安全な医療はほとんど医療界での重要案件にはなっていない。医療安全活動は21世紀になって本格的に事業化されたばかりである。数千年にわたる医療の歴史において、今日は、「安全な医療」が世界の医療界に注目された出発点である。時は今は、医療が歴史の大転換期にある。安全な医療を推進するという、医療の大転換が始まった。

しかし、多くの場合において革命や開拓の始まりの時には、旧体制から巨大な抵抗、反対がある。従って、医療安全推進という新事業に任務する方々にとっても、周囲からは暖かい支援・協力が得られず、煙たがれ、時には孤立する。

というわけで、医療安全を推進しようとする人々には日々に変な労苦が存在している。しかし、医療安全は医療倫理の中心であり、万人の普遍的人権です。医療安全推進するその努力は、20年後、30年後、40年後の世界において医療安全文化を定着・開花させ、医療を新しく希望に満ちたものにできる。その時、今の推進者の方々の献身的なご尽力が人類の歴史に深く刻まれる。

安全は公共財である。医療は他者の命を一時的にせよ預かる行為であるために大変厳しい医療倫理が存在する。生命商業主義に巻き込まれず、安全な医療の高い理想を掲げることが世界の医療人の本来の仕事でしょう…。

医療安全は真の医療の本道で、脇道ではない。安全でない医療は崩壊する。人々はそれを好まない。